

# 大雨による農作物等被害の事後対策

令和6年(2024年)7月2日  
 農 業 振 興 課  
 畜 産 振 興 課

## I 水稲

日照不足等の影響から軟弱徒長の草姿となり、降雨後は、急激な高温になることが懸念される。生育ステージに合わせた水管理等の基本的な栽培管理を徹底する。

### 1 冠 水

(1) 水稲生育ステージと冠水状況による被害歩合(該当：極早期～早期)

生育ステージ	冠水状況	冠 水 期 間				
		半日	1～2日	3～4日	5～7日	7日以上
分けつ期～ 穂はらみ期まで	清水冠水		10%	20%	30%	35%
穂ばらみ期	濁水 葉先露出		20%	50%	85%	90～100%
	濁水冠水	50%	70%	80%	85%	90～100%
	清水 葉先露出		10%	30%	65%	90～100%
	清水冠水		25%	45%	80%	90～100%
出穂期	濁水冠水		30%	80%	90%	90～100%
	清水冠水		15%	25%	50%	70%

(山口県 農作物等の気象災害対策技術資料)

(2) 冠水ほ場における対策

- ・冠水が続いているほ場は排水に努め、少しでも早く葉先が水面上に出るようにする。
- ・濁水の滞留、高水温状態で被害が大きくなるので、可能な限り新しい水に入れ替える。
- ・冠水した稲は徐々に浅水とし、通常の管理に戻す。

### 2 土砂流入

(1) 水稲生育ステージと土砂流入量による減収の目安

生育ステージ	土 砂 流 入 深				備考
	5 cm未満	5～10cm	10～15cm	15cm以上	
幼穂形成期	ほぼ影響なし	20%	30%	40～50%	S58 ヤマホウシ
穂ばらみ期	ほぼ影響なし	10%	20%	40～50%	S61 山陰豪雨

(山口県農業試験場)

## (2) 土砂流入田における技術対策

### ア 土砂の除去と用水の確保

- ・ 稲が深植え状態となり、酸素不足等による生育遅延が起こるため、可能な限り土砂の搬出を行う。
- ・ 用水確保のため、水路の土砂を除去する。用水路が破損した場合は、ポンプ等により用水を確保する。また、ほ場の水管理が難しい場合は、ほ場内に作溝を行い、雨水等を利用して用水の維持を図る。

### イ 稲体の健全化と減収の軽減

- ・ 土砂が流入した場合は、一旦落水して、根に酸素を供給した後、通常の管理に戻す。

施肥体系	流入物	追肥方法
緩効性肥料	砂	N1kg/10aを早めに
	泥土	施用しない
分施	-	落水により稲を健全化した後、8月上旬に基準量の穂肥を施用

## 3 病虫害防除対策

- (1) 冠水した稲は体内養分の消失により病虫害の抵抗力が弱まっているので注意する。特に、**白葉枯病**が発生しやすくなるので、常発地の白葉枯病に弱い品種（ヒノヒカリ、中生新千本等）では防除を行う。
- (2) **いもち病**は、長雨日照不足の状況で発生しやすくなるため、ほ場をよく確認し、発生を認めた場合は、直ちに薬剤を散布する。また、出穂前後の防除を徹底する。
- (3) **紋枯病**は、倒伏すると発生しやすくなるため、発生が認められた場合は速やかに防除する。

## II 大豆

降雨によるほ場冠水・滞水によって土壌水分が高い状態が続くと、根域が狭くなることが懸念される。ほ場排水に努め、土壌の通気性確保と雑草防除を目的として可能な限り早く中耕・培土を行う。

### 1 大豆開花期の浸冠水期間と被害割合

区分	浸冠水期間			
	1日未満	1~2日未満	2~3日未満	3日以上
冠水	5%	15%	50%	100%
浸水	3%	15%	40%	65%

(福井県 農業災害ハンドブック)

## 2 第1本葉期以降の浸水・冠水

### ○浸水・冠水後の生育

第1本葉期以降になると、冠水による枯死株の発生は少なくなる。通常第1本葉が展開する頃から根粒菌が着生してくるが、土壌の通気性が悪いと根粒菌が着生できず、葉色が黄化するなど生育が抑制される。この頃になると、雑草もかなり大きくなっているため、除草が必要になる。

- (1) 開花期頃の大豆では、土壌の通気性確保を目的として、可能であれば軽く中耕を行う。
- (2) 根粒菌は、第1本葉が展開する頃から着生してくるが、根粒菌が障害を受けて葉の黄化や生育不良が見られる場合は、窒素成分で1~4 kg/10a程度の追肥を培土と同時に行う。
- (3) ほ場条件が悪く中耕・培土ができずに雑草が多発した場合は茎葉処理剤の畦間散布を行う。
- (4) 乗用管理機による薬剤散布の際は、散布量を登録の範囲内で増やし、葉の汚れ等を除去する。

## 3 播種後～第1本葉期の浸水・冠水

### ○浸水・冠水後の生育

出芽すると冠水への抵抗性は比較的強くなるが、出芽直後に長時間滞水すると胚軸の地際部が傷んで枯死する場合がある。初生葉が展開すると、冠水による枯死株の発生は出芽直後より少なくなる。いずれも土壌の通気性が悪くなるため、その後の生育が抑制されて、葉色の黄化など症状が現れる。

- (1) 播種直後に冠水した場合、出芽率が低下することがあるため、極端に出芽・苗立ちが低下した場合、種子が確保できるようであればまき直しを検討する。
- (2) 浸水・冠水すると土壌の表面が固くなり、土壌の通気性が悪くなるため、土壌水分が低下するよう排水に努める。
- (3) **茎疫病などの病害**が発生しやすくなるため、発生状況により薬剤散布等を行う。

## 4 未播種ほ場での対策

- (1) 暗渠排水の開栓確認を行うとともに、額縁明きよの設置や排水溝の排水口への確実な連結確認等の排水対策を徹底し、可能な限り、早い時期に播種する。
- (2) 栽植密度 20~25 本/m<sup>2</sup>が確保できるよう、播種量を増やす。播種量増加に対応できるよう、種子量や播種機の調整・確認を行う。
- (3) 既存雑草が大きく、播種後に再生の可能性が高い場合は、汎用除草剤と初期除草剤を混用して対応する。

### Ⅲ 野菜

#### 1 夏秋トマト

##### (1) 大雨後の対策

- ① ハウス内に浸水した場合は、ハウス外に速やかに排水する。
- ② 畦間の滞水によりポリマルチをした畦内が過湿状態になった場合は、マルチをめくって土壌を乾かし、畦内の通気性を高める
- ③ 根が洗われて露出したり、株元がぐらつくものは軽く土寄せを行う。
- ④ 土砂が流入し株元が埋まった場合には、土砂を除去したり、流入堆積した表土が乾いて固くならないうちに中耕して通気を良くし、乾燥を促す。
- ⑤ 下葉除去や摘果により負担を軽減し、草勢回復を図る。
- ⑥ 浸水被害が大きく、生長点付近にまで泥汚れが付着している場合は、水で洗い流す。ただし、下位節の汚れであれば、洗い流しはやめて土壌乾燥を優先させる。
- ⑦ 根いたみしている可能性が高いため、土壌条件が改善してから液肥による追肥を開始する。
- ⑧ 今後の降雨に備えて、排水口の点検やほ場周囲の明きよを設置する。

##### (2) 大雨後の晴天で、気温が上がった時の対策

- ① 根いたみの影響で、生長点や花に萎れや焼けが発生した場合は、腋芽を伸ばし、主枝を更新する。
- ② 根いたみにより萎れがひどい場合は、蒸散と吸水のバランスをとるため、葉を強めに除去する。
- ③ 根いたみが発生した場合でも、灌水・追肥は行うが、施用量は減らす。
- ④ 生長点や花が枯れた場合は、そこから灰色かび病が発生する可能性があるため、予防防除を行う。
- ⑤ 遮光資材等を所有している場合は、遮光資材で被覆する。

#### 2 ホウレンソウ

- (1) 生育が進んだ状態で冠水したホウレンソウは出荷不能であるため、早期に引き上げ、ほ場条件が整い次第、播き直しを行う。
- (2) 幼苗は数日間経過を観察し、生育が旺盛であるなら栽培を継続する。
- (3) 栽培を継続する場合、高温になるようであれば、遮光資材で被覆する。

#### 3 その他、共通管理

- (1) 育苗中のイチゴなども含め、風雨等により損傷を受けると病害が発生しやすいため、速やかに適切な薬剤を選定し散布を行う。
- (2) 大雨で根いたみが起こっている状況での高温は、植物体の消耗が激しくなるため、負担軽減のため、摘葉、摘果を強めに行う。

## IV 花き

### 1 露地花き

- (1) ほ場内に滞水している場合は、排水口を確認し、排水溝との連結を確保して直ちに排水を行う。
- (2) 支柱の足元が緩み、傾いている場合は、茎が曲がらないよう速やかにフラワーネットを起こす。
- (3) キクやリンドウ、シンテッポウユリ等の露地栽培では、風雨による傷口から病害が発生しやすいため、不要な下葉を除去して通風を図るとともに、速やかに適切な薬剤散布を行う。
- (4) ほ場が冠水し、上位節まで茎葉に泥が付着した場合は、速やかに洗い流し、病害予防の薬剤散布を行う。
- (5) 大雨後の晴天で気温が上がる場合は、遮光資材を所有していれば、遮光資材で被覆する。
- (6) 草勢回復のために液肥の葉面散布を行う。
- (7) ほ場が乾いたら、次の降雨に備えて明渠の設置や排水溝の確保等を行う。

### 2 施設花き

- (1) ハウス内に浸水した場合は、直ちにハウス外へ排水する。
- (2) 湿度が高くなると病害の発生、軟弱な生育が多くなるので、換気の徹底や循環扇や加温機の利用により湿度低下に努める。なお、加温機が浸水した場合は使用しない。
- (3) 畦間の滞水によりポリマルチをした畦内が過湿状態になった場合は、マルチをめくって土壌を乾かし、畦内の通気性を高める。
- (4) 不要な枝梢や下葉を取り除き、草勢回復を図る。
- (5) 灰色かび病など病害の発生が多くなるので防除を徹底する。
- (6) 大雨後の晴天で気温が上がる場合は、遮光資材で被覆する。
- (7) 草勢回復のために液肥の葉面散布を行う。

## V 果樹

### 1 浸水、冠水、土砂流入による被害対策

- (1) 園地に停滞している水は排水溝等での排水に努める。  
特に粘土質の園では湿害を生じやすいので注意する。
- (2) 果実や葉に付着した泥は速やかに洗い落とし、殺菌剤を散布する。  
有袋果は日焼け発生防止に留意しながら除袋した後行う。
- (3) 流入土砂の除去  
園内に土砂が流入した場合は、主として根の分布域を優先に早めに土を除去する。  
土が乾燥し機械が入るようになれば浅く中耕し、土壌の通気性、透水性の確保に努める。

## 2 倒伏した樹体の対策

- (1) 倒伏した幼木樹等で回復が見込めるものは、できるだけ早く起こして支柱で固定し、その後晴天が続くようであれば適宜灌水する。
- (2) 樹体、根の損傷状況を見て、着果が多い場合は適正結果量とする。

## 3 病虫害防除

病虫害防除を的確に行う。

# VI 畜産

## 1 飼料作物への対応

- (1) 雨水の染み込んだロールベール乾草やサイレージ及び冠水したスタックサイロやバンカーサイロのサイレージ等については品質を確認し、飼料用として適当でない場合は、家畜への給与は中止し、不足分の確保に努める。
- (2) 滞水したほ場は排水溝を掘るなどして排水を促す。また、既存の排水施設に詰まりがないか点検して、排水路を確保する。
- (3) 播種したての草地などで冠水により表土が流失して裸地化した部分が大きいほ場は、イネ科牧草等による追播を早めに行う。

## 2 家畜管理への対応

- (1) 浸水した畜舎では速やかに排水対策を実施するとともに、舎内等の消毒・乾燥を促進する。また、畜舎内の雨水が引き次第、汚染部分を水洗いして消毒剤や石灰散布、石灰塗布を行う。
- (2) 乾草、サイレージ等の飼料は泥や雨水に当たっていないことを確認して給与する。

# VII 農業用機械・設備の動作確認

- ・冠水、浸水の被害を受けた農業用機械・設備は、JA 農機センター、販売店等に依頼して早急に動作確認を行う。水抜きが出来ていない状態でいきなりエンジンを始動したり、電源を入れたりすると、重大な故障につながる場合があるので農家個別での確認は行わない。